





はにゅうしりつとしょかん H31-No.11


【せつぶん・おに】


「おにはそと!ふくはうち!」
 いもと ようこ/文・絵 金の星社 Eオ

 2月3日は節分。「おにはそと! ふくはうち!」
 というかけ声とともに、家の中や外へ豆まきをします。どうして節分には豆まきをするのでしょうか? その理由がわかります。

「ふくはうちおにもうち」
 内田 麟太郎/作 山本 孝/絵 岩崎書店 Eフ

 節分の夜、男が一人で酒を飲んでいると、外で「さむいよう」と声がする。だれかと思ったら、鬼たちだった。それなら入れと男は誘い、やがて宴会がはじまった。そこへ…。


「せつぶんのひのおにいつか」
 青山 友美/作 講談社 Eセ

 ある晩、明日が節分だと思い出したおにいつかは、大慌てで準備をはじめました。節分の日の夕方、人間たちが豆をまき始めると…。


「ロボットおに」
 浅沼 とおる/作・絵 フレーベル館 Eロ

 もうすぐ節分。鬼と子どもたちの1年に1度の豆まき大会が近づいてきました。鬼の島では子どもたちに勝つため、強いロボット鬼を作りますが…。


「それからのおにがしま」
 川崎 洋/作 国松 エリカ/絵 岩崎書店 Eソ

 鬼退治のあとの鬼が島。やがて橋がかけられ、鬼たちと人間たちの交流が始まりました…。


「鬼のおっぺけぼー おんみようじ」
 夢枕 獯/作 大島 妙子/絵 講談社 Eオ

 羅城門へむかう牛車の前を歩くのは、まだ子どもも陰陽師、安倍晴明。そこへ、もやもや、雲のなかから鬼のむれがやってくる…!


【ねこ：2月22日はねこの日】


「ねこまるせんせいとせつぶん」
 押川 理佐/作 渡辺 有一/絵 世界文化社 Eネ

 ねこまる先生は、町外れのこども園の見習い先生。今年の節分は、ねこまる先生が鬼の役です。子どもたちの豆攻撃から逃げ回ります。さて、何がおきるでしょう?


「むかしむかしとらとねこは…」
 大島 英太郎/文・絵 福音館書店 EM

 昔、虎はのろまで獲物を捕るのが下手でした。そこで虎は、猫から上手に獲物を捕る方法を教えてもらいます。全部の方法を教えてもらった虎は、最後に知りたいたいことがあると言って…。


「ねこどけい」
 きしだ えりこ/作 やまわき ゆりこ/絵 福音館書店 Eワ

 こどちゃんの家鳩時計が気になる、猫のねねこ。猫の家をもらった、ねねこは、鳩時計をまねして猫時計に!

「11ぴきのねこ」
 馬場 のぼる/著 ぐくま社 Eシ

 おなかをすかせた11ぴきのねこは、やまのずうつとむこうのひろいひろいみずうみにいるかいぶつみたいなおおきなさかなをつかまえに行くことになりました…。

「ねこじたなのにお茶がすき」
 今江 祥智/文 ささめや ゆき/絵 淡交社 Eネ

 名なしの子猫が母さんに連れて行かれたのは、気むずかしそうなじいさまの家。じいさまは、猫たちにお茶をたててくれて…。

「ねこのさら 柳家小三治・落語「猫の皿」より」
 野村 たかあき/文・絵 柳家 小三治/監修 教育画劇 Eネ

 道具屋が江戸に帰る途中で立ち寄った茶店で、猫が絵高麗の梅鉢という高価な茶碗でご飯をたべていた。道具屋は、それを手に入れようとして…。

「ねこのはなびや」
 渡辺 有一/作 フレーベル館 Eネ

 夜空に打ちあがる花火の数々は、猫の花火師にとって一年に一度の晴れ舞台。たくさんの花火があがる、あがる。

「あったかいな」
 ぐすのきしげのり/作 片山 健/絵 廣済堂あかつき Eフ

 ゆうちやんの家の飼い猫・ミーちゃんがもうすぐ赤ちゃんをうむ。猫の出産に立ち会う二人の女の子と、命の誕生を描く。